



「無言館」シリーズ 5・・・第二章 希望の絵

□今回は『テノールソロと混声合唱のための組曲「無言館』の「第二章 希望の絵」の「霜子よ」について、再び、『遺された画集 戦没画学生を訪ねる旅』（野見山暁治 2004年 平凡社）から抜粋引用させていただきます。

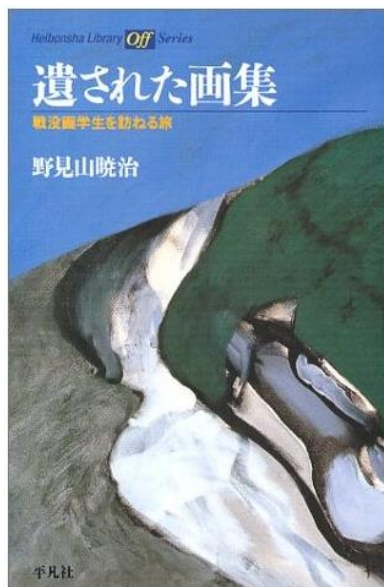
.....



中村萬平氏

昭和18年8月2日蒙古連合自治政府内の野戦病院にて戦病死。26歳。

▼よく私（野見山暁治）は萬平さんのうしろにくっついて飲んでた。萬平さんは大人びた扱い方で居酒屋の女たちと冗談をとぼし、歌をうたい、芸術論をぶった。気はつくし、金払いはいいし、ともかく気ツ風のいい男だった。



▼だれも中村とは呼ばなかった。マンペイ。私たち下級生はマンペイさんと呼んだ。萬平さんのことをどのように語ったらよいのだろう、あの爽やかな話しぶりだとか、体力の漲った闊達なうごきだとか、無造作に後ろへかきあげた髪の流れ。それらは画学生の、生きたモニュマンのように思い出される。太い筆で荒々しく書きなぐるようにして彩られた萬平さんの画面は、他の学生たちの細かい思いやりの筆致とは違って、なにか私たちをあおるものがあった。

▼戦時体制になって以来途だえていた美術学校の芸術祭を、配属将校のところへおしかけ、校長を説得して強行したり、クラスの仲間を集結して同人展を作り上げ、その当時珍しいことであったが、銀座のギャラリーで旗揚げをしたりした。萬平さんはそういう交渉には柔らかい一種の商才のごときものをもっていた。

▼世の中はもうとめどなく戦争に向かっている。卒業を待ち構えているようにして学生は戦地へ追いやられるだけだ。萬平さんは卒業制作にモデルを使って取り組んだ。あるいはこれが最後の絵になるかも知れない。

▼モデルの彼女は目立たない明るい気質の女だったので、突然、彼女と結婚するんだと萬平さんが公言したとき、唐突な気持ちではあったが、女にもてる男の行きつくところは器量ではないのだなと感心した。オーバーコートを着た彼女が、室内で立っている姿を描いた作品で萬平さんは首席をとり、妊娠した彼女を連れて浜松の実家へ帰って行った。

▼実家は浜松でも有名な老舗の菓子屋で大勢の職人もいた。どんな格式の家からでも嫁をもらえると胸をふくらませているところへ、息子が妊娠した女を連れて帰り、ともかくも彼女を家に預けてあわただしく北支へ旅立った。初年兵はせつせと中国から手紙を書き送って、妻の霜子とおなかの子供を思いやり、母親によくよく気づかいを頼んだ。



中村萬平 霜子

▼元気な男の子が生まれたが、産後の肥立ちが悪かったのか、子供を産んでからわずか半月で妻は死んだ。妻からの便りがこないのを不審がった萬平さんからの再三の問い合わせの後、ようやくにして事情が知らされた。

▼「霜子がなくなった時刻に、小便におきて、いつにない大きな月が私のところを惹きつけました。しばらくながめていましたが、あれが霜子だったのですね。霜子は私の事を太陽にたとえて歌を作ったり、尊敬もしてくれました。それで自分が月になって私に別れに来ました。月を見ると思ひ出します。それにしても年取った両親に不幸を重ねて申訳ありません」

▼翌年、萬平は北支武川で戦病死。子供を一度も抱くこともなく遠く離れた地でこの世を去った。

▼息子さんは、両親を見たこともなく祖父母の手によって育てられた。とっくに父親の年を越え、結婚して子供もいる。

(「無言館」シリーズは一旦これで終わりとしします。演奏する上で参考になりましたでしょうか。編集子自身は転載していて何度も胸がつまりました。資料提供のご協力ありがとうございました。)